

19	安城	今池小学校	ヒシキ ユウト
			名前 日紫喜 憂斗
分科会番号	20	分科会名	総合学習

研究題目

3年 総合的な学習の時間 他者の困り感に寄り添い考える子どもの姿を目指して
～福祉学習「ともに生きる一助け合えるあたたかいまちをめざして～」～

研究要項

1 研究の構想

(1) 研究のねらいと仮説

本学級では、授業の中で問題が解けた後には、困っている子がいたら声をかけ、教え合うことを推奨している。教えようとすぐに動き出せる子もいれば、困っている子に気付かず、動き出せない子もいる。また、動いている子の中には、本当は助けを必要としていない子に声をかけてしてしまうこともある。そのような様子から、周りの人を意識し、本当に助けが必要な人に手をさしのべる必要があると考えた。そこで、手助けが必要とされやすい車いすに着目し、助けを必要とする人に対して、相手のことを考えた行動をする力が育まれるような授業にしたいと考えた。また、子どもの思いをもとに学びを進めながら、知識や多様な考えなど、様々な学びを関連させることで、困っている人に対して、自分たちができることを考える手段や態度を培うことができないようにしたいと考え、本課題を設定し、研究を進めることとした。

<研究のねらい>

他者の困り感に気付き、相手の立場に立って手助けができるために、自分にできることを考える子どもの育成。

また、前述のねらいに迫るために、以下の研究仮説を設けた。

仮説 1 共生社会を目指す福祉学習において、車いす利用者の不自由さを実感できる体験活動をしたり、日常生活を知るための調べ学習をしたりすれば、子どもたちは困り感に気付き、手助けをしたいという思いをもつであろう。

㉞ 仮説 1 に迫るための手立て

- 手立て① 車いす利用者の不自由さを実感するために車いす体験活動を行う。
手立て② 車いす利用者の日常生活について、詳しく知るために調べ学習を行う。
手立て③ 車いす利用者を身近な存在であると感じるための場を設ける。

仮説 2 共生社会を目指す福祉学習において、自分の考えを整理するための思考ツールを活用したり、視点を焦点化した振り返りの場を設定したりすれば、子どもたちは困り感をもっている周りの人のために、自分たちができることを主体的に考えていくであろう。

㉟ 仮説 2 に迫るための手立て

- 手立て④ 自分の考えを整理するための思考ツールを活用する。
手立て⑤ 次時の活動につながる振り返りを工夫する。

(2) 抽出児について

本実践研究の検証のために、抽出児として児童Aを選出した。

児童Aは手助けをしたい気持ちはあるが、本当に助けを必要とする子に気付くにくく、動き出すことに戸惑うことがある。児童Aを通して、本研究の手立てが、車いす利用者の困り感に気付き、寄り添い手助けをすることにつながっていくかを検証する。

2 実践の内容

(1) 車いす利用者の不自由さを実感するための車いす体験活動Ⅰ～校内～（手立て①）

単元の導入として、車いすを利用したことのある児童にその時の生活について話を聞いた。その時の振り返りには、困ることやできないことへの驚きと「どのような感じなのかやってみよう」という記述がみられた。そこで、校内で車いすの体験学習を実施した。子どもたちは、普段の学校生活をもとに、教室やトイレ、廊下、昇降口、校庭などを車いすで移動した。体験の前に立てた予想は、体験談をもとに「高いところが届かない」や「昇降口の段差が怖い」であった。しかし、体験をしてみると予想を大きく上回る不自由さが多くあることを実感した。特に、トイレでは、奥の広めの個室にしか入れず、方向転換も難しいことがわかった。【写真1】そのため、出る時にはバックする必要があり、不慣れた車いすの操作も重なり、かなりの不自由さを感じていた。昇降口では高い位置と低い位置のどちらも下駄箱から靴が取り出しにくく、届かない子もいた。



【写真1 トイレでの車いす体験Ⅰ】

体験後の児童Aの振り返り【資料1】には、階段で車いすを3人がかりで運んでいる写真と図書室で狭い通路で思うように動いていない写真、低い場所の本をとることができなかった写真が添付されていた。児童Aは学校外でも、学校と同じように過ごしやすいところと過ごしにくいところがあると予想していた。しかし、狭い道をどうするかという自分たちの力では解決の難しい課題に当たり、困った表情を見せた。



2023年6月9日（金）4時間目 総合的な学習の時間 3年2組に公開中

車いすの操さを前提に、分かった事は、学校は、車椅子生活にとって安全なわけでもないまた、全く対応していないわけでもないそう考えると、学校外でもそうなっているという事、これからは、車椅子で困っている人を助ける取組をしたいと思います。また車椅子の人が住みやすいまちをかんがえ、じっこうしたいとおもいます。話し合ってたことは、やはり車椅子の人にとって狭い場所は、危険という事です。まだまだ狭いところは、あるのでどうすれば広く車椅子の人たちが、快適で暮らしやすいまちになるかなやんでいるので、くもりです。

【資料1 車いす体験後の児童Aの振り返り】

(2) 車いす利用者の日常生活を知るための調べ学習（手立て②）

校内での車いす体験後、「車いす利用者を助けることのできる場面を考えるのに困ったから本やインターネットで調べてみたい」という振り返りから、調べ学習を行った。調べる手段として、インターネット検索と市の図書館の貸し出し便を利用した福祉関連の本を用意し、子どもが必要に応じて選択することができるようにした。本やインターネットを通じて、車いす利用者がどのように家で過ごしているのか、日常でどのように移動しているのか調べてまとめた。「階段しかない場所ではどうしているのだろうか」と疑問をもった子が、インターネットで調べてみると昇降機があることを発見した。バリアフリーやユニバーサルデザインについて調べた子は、子ども用に分かりやすい言葉やイラストのある本を読み、その理念を知った。他にも、車いすにはいろいろな種類があり、車いすで行えるスポーツがあることも分かった。調べ学習を進めていく中で、社会にはバリアフリーやユニバーサルデザインという考えがあり、障がい者や高齢者、妊婦、子どもなどの社会的弱者のための工夫があることや、誰もが生きやすい社会を目指していることが大切であることを知り、自分たちの日常生活にも関わっていることに気付いた。

車椅子利用者の大変な事 (役立つ物)	階段の登り降りに役立つ物
犬の散歩の大変な事	このきかいが無いと大変な事は、車椅子利用者がけんけんで階段を降り事になるからです。
犬の散歩で大変な事は、リードを持ちながら車椅子のタイヤを回す事です。	
買い物の時に役立つ車椅子	エスカレーターの代わりになるきかい
この形の車椅子が無いと大変な事は、かごを膝の上に置く事になるからです。	このきかいが無いと大変な事は、1回だけ降りてエスカレーターに乗らなやいけなくなるからです。

【資料2 調べ学習のまとめ】

(3) 車いす利用者を身近な存在であると感じるための場の設定（手立て③）

調べ学習後には、「車いす利用者の話を聞いて、気持ちを知りたい」という思いから、車いす利用者の日常生活や気持ちを知るために、車いす利用者の方を招き、日常生活の様子と工夫、困り感についての講話をしていただいた。【写真2】子どもたちは、話を聞く中で、マジックハンドや車いすに自転車の鈴のようなものをつけるなどの工夫を知った。しかし、工夫してもどうしてもできないことがあり、その時は人の手助けが必要である。また以前、買い物中に届かない商品があり、困っていたところ、小学生が手助けをしてくれて、とても嬉しかったという話を聞いた。車いす利用者の方だけでなく、介助者である親族の方にも来ていただき、手助けをしている側の話や車の設備を実際に見せていただくことができた。これまで車いす体験の中で自分が車いすを利用するときに気を付けたいと記述していた子どもが、講話後の振り返り【資料3】には、車いす利用者の方が周りの様子を気にしていたり、困っていたら声をかけたいという相手の立場に立つ考えが伺えた。



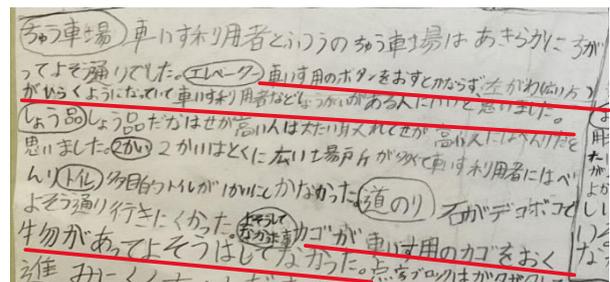
【写真2 講話の様子】

車いす利用者の方は、大変なこともたくさんあるけれど、たくさんの工夫や手助けがあることで、いろいろなことができるようになることがお話を聞いてわかりました。車いす体験だけでは、わからなかったいいことやわるいことを知ることができました。車いす利用者のために、こうだったらいいなということもわかったので、私もこれから取り組みたいです。

【資料3 講話後の児童Aの振り返り】

(4) 車いす利用者の不自由さを実感するための車いす体験活動Ⅱ～校外～（手立て①）

車いす利用者の困り感を知るためには話を聞くだけでは、不十分という子どもの考えと「より日常生活に近づけるために校外での車いす体験をしたい」という思いから、学区内のスーパーマーケットやコンビニ、駅などの公共施設へ学校から車いすで移動する体験を行った。校内での体験と同じように予想よりも数多くの不自由さを感じ、普段何気なく通っている通学路や施設も車いす利用者にとっては、不自由さや怖さがあると実感できた。その一方で、【資料4】のように、スーパーマーケットには車いす利用者のために一般のエレベーターよりも大きく設計されたエレベーターがあることや車いすに装着することができるカートがあることを見つけた。不自由さだけでなくスーパーマーケットや公共施設では、車いす利用者をはじめとした障がい者や高齢者が安心して過ごすことができるような工夫がされていることに気付くことができた。他の施設へ体験に行った子も同様に、不自由さだけでなく、多くの工夫に気付いていた。校外での活動をしている最中に、実際に車いす利用者の方を見たり、話を聞くことができたり、働いている方から車いす利用者の方も利用されているという事実を聞くことで車いす利用者の日常生活を垣間見ることで自分事として考えることができた。



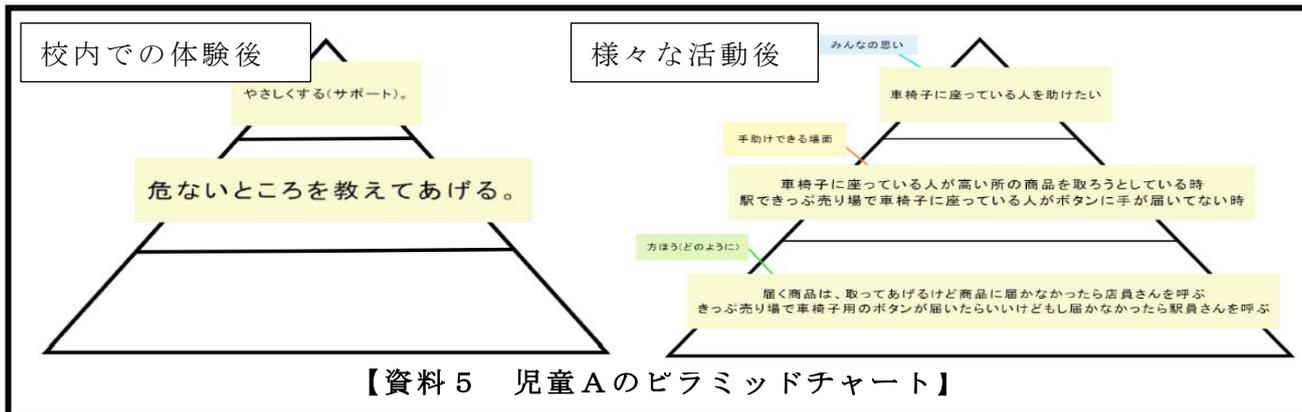
【資料4 車いす体験後の児童Aの気づき】

(5) 自分の考えを整理するための思考ツールの活用（手立て④）

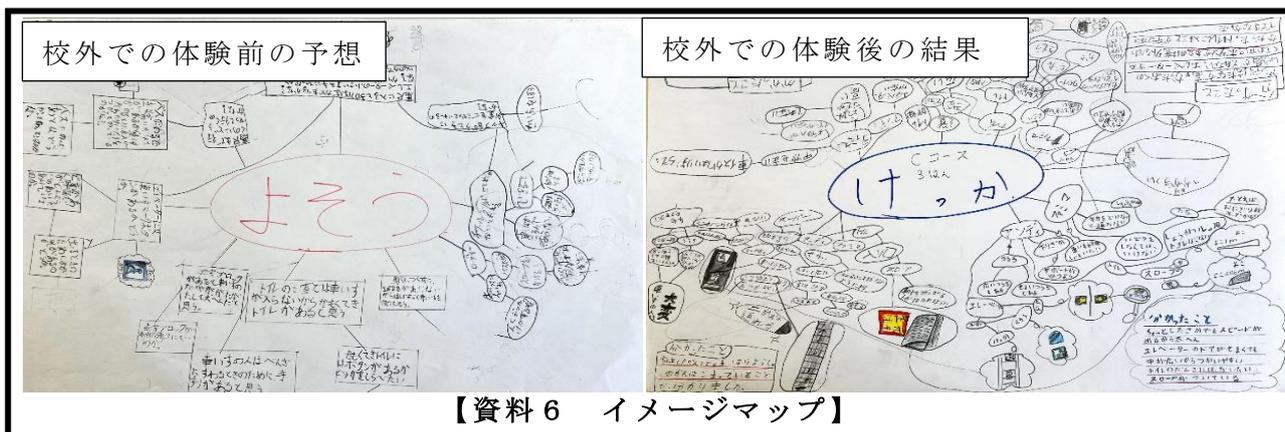
本単元では、子どもが自分の考えを整理するために「ピラミッドチャート」と「イメージマップ」の2つの思考ツールを活用した。「ピラミッドチャート」は、自分たちができることを考える活動の中で「自分たちの思い」・「行動する場面」・「方法」の3つについて順に整理していくことで、思考を明確化できるようにした。校内での体験学習後に行った際は、「場面」と「方法」に具体性がなかった。中には、【資料5】のように、場面と方法が混ざってしまうような子も見られた。子どもたちは自分たちがよくわかっていないこ

とを自覚し、その後の体験活動で何を学びたいかというきっかけとなった。

様々な学習をした後に再度、自分たちにできることを考えた際には、「場面」と「手段」がより具体的になった。



「イメージマップ」【資料6】では、校外での体験学習の予想と結果を整理するときを使用した。子どもの中には、思考を文章化することが難しい子たちもいる。そこで、文章化する前のスモールステップとして、思考につながるキーワードをどんどん書き出し、関連付ける思考ツールを活用することにした。まず、体験してきたことを書き出し、その後、異なる場所や施設でも同様の工夫があるところを線で結び、関連付けることができた。また、予想よりも結果のイメージマップのほうがより多くの情報が出てきていることが視覚的にも明瞭であり、体験学習で多くのことを学んだことを実感したと思われる。



(6) 次時の活動につながる振り返りの工夫(手立て⑤)

子どもの思いをもとに学習課題を設定することで、主体的に課題解決するように、振り返りを充実させ、次時の学びへとつなげるようにした。振り返りには、「今日学んだこと」「友だちの意見から気付いたこと」「次の時間で行いたいこと」の3点を基本として記述するようにした。校内での体験後の自分たちにできることを考える活動以降は、振り返りの視点には、自分たちができることを考えるために必要なことを記述するようにした。すると、「車いす利用者の日常生活や気持ちを知るために校外での体験学習したい」「もっと調べ学習したい」「車いす利用者の話を聞きたい」といった具体的な活動が示され、意欲を高めた振り返りが見られた。【資料7】それを授業の導入にMyタブレットで、全員が共有・確認することで、本時の活動の動機とし、子どもの思いから学習が進められるようにした。

2023年6月12日(月)5時間目 総合的な学習の時間

【資料7 校内での車いす体験後の振り返り】

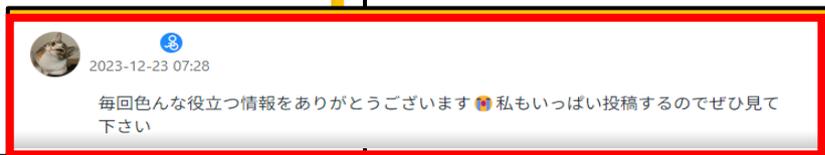
今日二つ目の段が「合わないと出来ない事」しか書けなくて困りました。

車椅子利用者の気持ちを知る為にやりたい事は、本やインターネットなどの意見を参考に見たいです。また、今日車椅子利用者の気持ちが分からなかった分、身の回りに居る車椅子を体験したことがある人に聞いてみたいです。二段目が書けなかったから、曇りです。

自分たちにできることを考えていく中で、「これまでの車いす体験や調べ学習、車いす利用者の方の話を聞いて学んだことを多くの人に伝えることが自分たちにできること」という思いをもった。ポスターやチラシ、SNSといった方法が子どもたちから出てきた。「より多くの人に伝える」ことに注目した結果、「Wheelog」という車いす利用者の方のために作られた地図アプリに情報を投稿することとなった。子どもたちは、これまでの学習で得た伝えたい情報を整理し、投稿内容を考え、教員が投稿した。【資料 8・9】



【資料 8 Wheelog への投稿】



【資料 9 Wheelog 一般の車いす利用者の方からのコメント】

8 研究の成果

(1) 仮説 1 について

校内での車いす体験では、学校生活で通るような場所も思うように動くことができないことに気付くことができた。校外での車いす体験では、不自由さや困り感だけでなく、車いす利用者に対する工夫に気付くことができた。体験に行った施設は、普段から子どもたちが利用している場所である。しかし、車いす用のカートがあることを予想していなかったこととして挙げている。これは、車いす利用者という視点で訪れたからこそ気付くことができたと考える。

校内での車いす体験で子どもたちが感じた「階段はどうしているのだろう」といった自分の疑問をもとにした調べ学習をすることで、車いす利用者や関連する道具、用語などの知識を得ることができた。これらの活動によって、車いす利用者の日常生活のイメージがより具体的になった。バリアフリーという共生社会へつながる言葉に辿り着く子どももいた。これにより、車いす利用者が過ごしやすい社会をつくるためには、車いす利用者だけが努力するのではなく、社会に生きるみんなが意識し、努力する必要があるということに気付くことができた。また、そのみんなに子どもたち自身を含んでいることから、助けたいという気持ちが育まれていると考える。

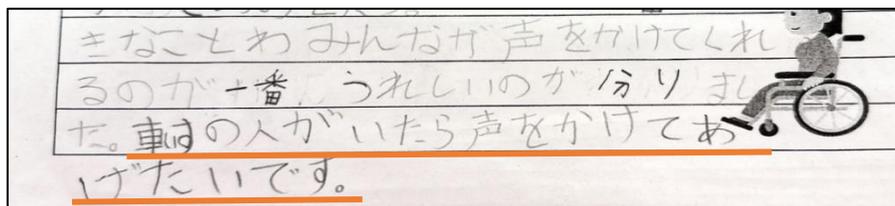
子どもの振り返りの中に、他者の困り感へ寄り添う気持ちが多く見られるようになったのは、手立て③の講話であった。これまで校内での車いす体験や調べ学習の後の振り返りには、「自分が車いすに乗った時には」や「自分がけがをしたとき」という言葉が見られ、車いす利用者の方のためではなく、自分が車いす利用者になってしまった時のために、車いすについて学習していくという様子が見られた。【資料 10】

2023年6月9日（金）5時間目 総合的な学習の時間

【資料 10 校内での体験後の振り返り】

①たいけんしてわかったことは思ったよりくるまはすはたいへんだしとくにげたばこはだんさがあつてあぶないからサポートがいると思います。②話し合つて分かつたことは ちゃんが西トイレとちがつて車かいるよこはばが大きいトイレもあるけど手あらいは、たかさがたかいからたいへんていうところがいいとおもいました。③もしも自分がこっせつだったらみんなにたすけ自分はできることをしてできないことはみんなにたすけてもらいます。

しかし、そのような振り返りを書いていた子も実際に人に会い、話を聞いたことで、車いす利用者のために自分たちができることをしたいという思いが振り返りに表れるようになった。【資料 11】



【資料 11 講話後の振り返り】

この講話以降、子どもたちの振り返りには、自分たちができることとして、「困っていただけたら、声をかける」という言葉が多くみられるようになった。また、ただ声をかけるだけでなく、車いす利用者を店員や親などの大人とつなげる役割を担おうとする子もみられた。

(2) 仮説 2 について

「ピラミッドチャート」と「イメージマップ」を活用することで、自分たちの思考を構造化し、手助けをする場面や方法について、具体的に記述することができた。「ピラミッドチャート」では、「自分たちの思い」や「行動する場面」、「方法」に思考を分類することによって、具体的な場面や方法が出てこないことが分かった。その部分を書くためには、車いす利用者の日常生活や気持ちをもっと知る必要があるという次の活動を決める指針となった。「イメージマップ」は、たくさんの情報を得た体験活動をまとめる上で、文章を書くのが苦手な子も進んで取り組むことができた。また、体験の成果が視覚的に捉えることができた。

【資料 12】のような思いをもつ振り返りを次時の活動の動機としたことで、子どもたちは主体的に活動し、その後の振り返りにも意欲を高めた。学びを継続し、自分たちができることを考え、積極的に行う姿がみられた。

【資料 12 体験後、ピラミッドチャート使った授業での児童 A の振り返り】

ピラミッドチャートをして感じたことは、車椅子利用者の助かることは、分かったけれど、どうやって、車椅子利用者が困っているところを探せばいいのかと言う、疑問が生まれました。これから取り組んでいきたい事は、いろんな所にいる車椅子利用者に、大変なこと、利用すると便利なことを伝えたいので、ポスターなどに書きいろんな人に調べたことを伝えていきたいです。

9 今後の課題

本研究を通して、次の 2 点を課題としたい。

1 点目は、車いす利用者との関わり方である。【資料 10, 11】の講話での振り返りの変容にある通り、子どもたちにとって、手助けが必要な対象が明確であることは、課題解決への意識を高める手段として、有効であった。しかし、本単元での車いす利用者の方は学区外に在住されているため、子どもたちが校外での体験学習で得た成果が、直接的に利用者の手助けになりづらい。今回のように、車いす体験からはじめていくのではなく、単元を通して、学区内の車いす利用者の方と何度も関わり合いながら進めていく展開で活動ができれば、より子どもたちは、自分との関わりを実感し、課題解決への意欲を高めることができたと思われる。

2 点目は、子どもたちの達成感についてである。今回「Wheelog」に投稿したが、不特定多数が投稿を閲覧することができるため、情報の取り扱いの観点から、教員が子どもの考えた情報を精査して投稿した。そのため、子どもたちが作った文章とは形態が異なるため、自分たちが情報を届けたという実感が湧きにくい投稿方法となっていた。今後は投稿する様子を子どもたちの前で行うなど、より自分たちが発信したという思いをもてるように支援していく必要がある。

児童 A をはじめ多くの子どもたちが、「車いす利用者の方のために」という思いをもって取り組んでいた。次のステップとして、隣にいる友達の困り感に気付き、手助けしあえるような子どもへと成長することができるよう実践を重ねていきたい。